

中嶋嶺雄

中ソ 首脳会談 と 人民の波

ついに中国の事態は、大規模な流血の悲劇へと展開した。去る四月二十日に首都北京に戒厳令が発せられて以来、天安門広場の学生たちは、長い街頭行動の疲労もあって、徐々に鎮まりかけていたのに、無抵抗、非暴力の愛国的学生に一方的に銃弾を浴びせるという暴虐を、鄧小平らの中国当局はあえて敢行したのである。中国の歴史においてはもとより、今日の社会主義世界において、一九六八年の「プラハの春」においても、一九八〇年のポーランド「連帯」運動においても、ここまでひどい事態はなかったのであって、「反革命暴乱」という言葉は、そのまま中国の指導者に向けられるべきではないのか。

今回の出来事によって、中国共産党はかつてのスターリン暴政と同様の「民衆の敵」と化したのであり、中国革命の成果を最終的に歴史の汚辱の中に投げ棄てたものといえよう。まさに革命四十年にして中国は、人民共和国解体への道をついに歩み始めたとも言えよう。

それにしても、中国にこのような事態が起こった一つの重要な原因として、皮肉にもペレストロイカの旗手・ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の訪中があった

ことは言うまでもない。その意味でも、世界注視のうちに極めてドラマチックなカタチで終幕した、去る五月十五日から十八日までの中ソ首脳会談は歴史的な出来事であった。政治改革を掲げる学生たちのいわばペレストロイカ歓迎によって、ゴルバチョフ書記長は北京では天安門前広場に足を踏み入れることもできず、故宮博物院も訪れることができなかったという、思いもかけぬ事態を伴った首脳会談であったことも忘れがたい。胡耀邦氏の死によつて盛り上がった学生デモが、ゴルバチョフ訪中によつてさらに刺激され、北京で百万、さらには全国津々浦々で盛り上った広範な民主化要求のデモとなったことに示されるように、大変なおみやげを残して帰国したのである。このようなドラマが舞台の背景に存在したと自体、実は今回の首脳会談の性格を如実に物語っているように思う。つまり、それほどまでに今日の中ソ両国は社会主義国家として民主化要求や民族反乱などさまざまな内部的問題を抱え、そうした国内政治や経済の再建のためにも中ソ両国の歴史的和解が必要であったことを、今回の北京での出来事は象徴的に示していたと言えよう。

そのような中ソ首脳会談はまず第一に、中ソ二国間関係の歴史的な発展を画したと言わざるを得ない。鄧小平―ゴルバチョフ会談によつて、過去の対立を解消し、中ソ関係の完全正常化を両党関係まで合めて実現することが宣言されたからである。そしてこのことを象徴的に示すように、これまで中断していた「人民日報」と「プラウダ」の記者交換も実現することになり、両党関係はここにおいてかたちのうえでも完全な正常化を遂げたことになると言えよう。

第二は、そうした国家間関係や党関係のわだかまりに決着がついたということのみならず、これからの中ソ両社会主義大国の再生と再建のために、さまざまなレベルの協力関係がさらに強化されることになった点である。

中ソ間の経済協力、特に合弁企業設立、すでに一部設立されている紙・パルプ合弁企業などの量的な拡大、さらにはゴルバチョフ北京演説にも表れていたように、新しいシルクロード開発計画——これは中国の内陸開発の目玉として、これまでソ連との協力によつて進められてきたいわゆる「大西北計画」だが、新疆ウイグル自治区からカザフ共和国に至る

新しい中ソ鉄道を中心とした中ソ国境地帯の経済的再建の青写真が明白に示されたことも指摘しないわけにはいかない。

そして、黒竜江省などを中心とする中国東北部と極東部ソ連との開発のための協力も今回ほほ明らかにしたのであり、中国からの労働力の輸出、ソ連からのプラントや技術の提供、かつての中ソ友好時代の対中援助によってできた工場や機械の補修、更新などの問題や中ソ貿易の積極的拡大など——おそらくあと十年ぐらいのうちに百数十億米ドル規模になると見られる——二国間の経済交流がさらに積極的に進められることになった。

第三には、社会主義の改革に関して中ソ双方が相互に経験を交流し、教訓を学び合うということが語られたことだろう。特にゴルバチョフ氏は、北京の民主化要求、政治改革を求める学生たちの反乱を目的の当たりにして、社会主義の改革の困難さと、それが持つ危機的側面についても認識を改めたにちがいない。

こうして中ソ関係にはさまざまな成果が記録されたが、国際的によどのような影響を及ぼすかについて最後に触れてみたい。

まず第一に、中ソ関係改善を軸にして、

周辺の社会主義諸国に大きな影響をもたらすだろう。中ソ首脳会談の開幕に合わせてモンゴルからソ連軍の撤兵が開始されたことも象徴的である。ごく短期間のうちに四万五千人前後の在モンゴル・ソ連軍の四分の三が撤兵することが明るみに出たのだ。こうしたなかで、中蒙関係の改善も進み、北朝鮮と中ソの関係もさらに緊密化するものと見ていいだろうし、カンボジア問題でも、民族自治を原則とした決着が図られる方向が出たことにより、中越関係も改善されてゆくであろう。

こうして、東欧諸国との関係も含めて、社会主義の緩やかな再編、緩やかな同盟関係が編成されると思われる。

ゴルバチョフ書記長はこの点を「連帯」と表現していたが、そうした社会主義的な連帯関係の回復が一方では行われ、それを基盤として西側との交流を進めるという、社会主義の足場の強化という問題が出てくるように思われる。

従来のように、それぞれがばらばらの方向で西側に接近することのマイナス面、その危険な側面についても認識が深まっただけである。

最後に全世界的な影響だが、中ソ和解が昨年以来の米ソの歴史的な緊張緩和と

いう方向のなかで行われたもう一つの緊張緩和であったという点に注目せざるを得ない。特にゴルバチョフ氏は北京演説で、極東の兵力十二万人削減という問題を具体的に明らかにした。十六隻の太平洋艦隊を含む船舶の削減をも明らかにしたが、ウラジオストクを拠点とするソ連の海洋戦略、海軍戦力がいよいよ、これまでの拡大から削減のほうに転換した契機だと思える。

こうしたことは当然、米ソ関係の緊張を緩和し、さらにソ連がアジア・太平洋地域に中国とともに積極的に関係を強化する基盤を拡大したと思われる。

そうした意味でも、今回の中ソ首脳会談は、中国の民主化運動が建国四十年にして中国に「もう一つの革命」をもたらしつつある今日の深刻な事態とともに、きわめて大きな影響を世界にもたらすものではないか。もとより、こうした歴史的な中ソ首脳会談を成し遂げた鄧小平氏に対し、中国の学生や民衆は、彼の「人治」による独裁をまっとうから批判し、それに対して暴虐極まりない弾圧が行われているだけに、中国の今回の出来事は、中ソ首脳会談の成果を一挙に台無しにするかもしれない。6・5記(なかじまみねお)